

ヨオロッパの世紀末

吉田健一



筑摩叢書 310

筑摩叢書 310

ヨオロツパの
世紀末

吉田健一



筑摩書房

吉田健一（よしだ けんいち）

1912年 東京に生まれる

1977年 死去

英文学者，評論家，作家

著書『吉田健一著作集』（全30巻，補巻2）ほか

ヨオロツパの世紀末

筑摩叢書 310

1987年4月23日 初版第1刷発行

著 者 吉 田 健 一

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

郵便番号 101-91

電話 東京 (291) 7651番 (営業)

東京 (294) 6711番 (編集)

振替 東京 6-4123番

© 1987 Printed in Japan

ISBN4-480-01310-5 C0095

厚德社・永興舎

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

ヨーロッパの世紀末

解説

松浦
寿輝

247

3

ヨ
オ
ロ
ツ
パ
の
世
紀
末

I

先づ廻り道をするところから始める。

ヨオロツパといふ一つの文明の歴史を振り返つて見るとヨオロツパがその性格を完成し、我々がヨオロツパといふものと結び付けて考へる各種の特徴を凡て備へるに至つたのが西暦で言へば十八世紀であることを強く感じる。これはヨオロツパにゐる人間が行ふ精神活動の各部門での発達がその後止つたといふことでは勿論なくて、寧ろヨオロツパといふことで直ぐに我々の頭に浮ぶ政治上の制度と科学が我々にとつて馴染みの、或は我々が馴染んだ積りでゐる形を取つたのは十八世紀よりも先のことである。併し例へば政治の面では、もし政治上の形態といふものに対するヨオロツパの寄与が今日では民主主義といふやうな名称で呼ばれてゐる代議制であるならば、英国やオランダの議会政治は十八世紀に既に他の国々によつて亀鑑と見做される程度に確立し、十八世紀の英国の議会政治が今日の日本と同様に腐敗の極みにあつたこともその確立の証拠にな

るものであり、その後の改善は發達であるよりもこれは常識的な是正に過ぎない。

科学に至つては十八世紀を待たずに十七世紀の後半にホイゲンス等の研究でデカルトの幾何学的な宇宙が力学的な宇宙で置き換へられ、光の早さが測定され、誰でもが知つてゐるさうした業績を列挙するよりもその業績に即して、これは我が国では余り取り上げられない事件であるが、古代と現代の優劣に就ての論争が解決した。これは要するに古代、或はギリシヤ、ロオマの時代と比べてその後のヨオロッパが文明の点で優れてゐるか劣つてゐるかといふ、ルネッサンスで古代の世界が再び發見されてから何かの形で続けられて來たもので、例へばそれが文学ならばラシイヌやモリエールとギリシヤの劇作家達とどつちがいいかといふことになり、これは意味がないことであつても科学では或る物体よりも六倍の重さがあるものがその物体よりも六倍の早さで落下するかどうかといふやうなことは実験するだけで明白になる。既に十七世紀の末にこの古代と現代の問題が現代に有利に解決したのであるから少くともヨオロッパは言はばヨオロッパとしての自覺があつて十八世紀を迎へたのである。

この論争がフランスでその最終的な形を取つた際にその主な材料になつたのは文学だつた。そして傑作を比較してそこに差を付けるのは傑作、或は文学といふものの定義そのものに反してゐても、例へばフォンタネルが古代の文学に対して挙げたラシイヌやモリエールが明確にヨオロッパの文学と呼べるものであることは認めなければならない。それではギリシヤ、ロオマの文学が

ヨオロツパのものではないかどうかを言ふ前に、このことに具体的な手掛りを与へる爲に、却つて話が飛ぶやうであつても、日本でも普通に行はれてゐる古典主義と浪漫主義に就てここで改めて考へて見る必要がある。今までの定説に反して実際には古典主義よりも先に浪漫主義があつた。ヨオロツパの文学史の上で或る一定の傾向が現れてそれが殊に顕著になり、これに名前を付けなければならなくなつた時にそれがこの傾向の原因になつた事情から物語風、或は浪漫主義と呼ばれ、マリオ・プラズがその「浪漫主義の臨終」で指摘してゐる通り、浪漫主義が或る段階まで来てそれ以前の時代に対する懐れが生じてこれに別な名称を与えることが必要になつたのが古典主義である。

ここで古典は今日では一般に用ゐられてゐる傑作といふ意味ではなくて古典主義の古典がギリシヤ、ロオマの文学に相当する。現に自分達がしてゐる仕事、及びその世界に憧れるといふことはない。ギリシヤ人やロオマ人にとつて古典主義の古典がその彼等の世界だつたので、彼等が詩を論じ、文学に就て語つても古典主義などといふのはその語彙になかつた。この言葉の語源になつてゐるラテン語が最初に出て来るのもロオマ文学さへもがその終焉に近づきつあつた二世紀のことである。併しその彼等の文学はどういふものだらうか。これは大変な問題のやうであるが、古代と現代の論争の分類に従つて古代以後の文学とギリシヤ、ロオマといふ風に考へるならば、その参考になる範囲で彼等の文学の輪廓を描くのはそれ程困難なことではない。それには彼等の

文学とその後のことに属するヨオロツパの文学の間に何か異質のものを感ずるといふことがあるかないかが一つの手掛りになる。

文学といふのはそれを書いたものがどのやうなことを考へ、それが書かれた時代のものがそれをどう受け取るのだらうと言葉といふものの性質から書いてあることに別な意味を読み込み、そこから違つた色彩を生じさせることが出来て、言葉が言葉であることを失はない限り、それが必ずしも曲解、或はこじ付けとは言へず、一つの作品が或る時代から次のへと読み継がれるのも一つには言葉にそれだけの幅、或は奥行きがあるからである。併し同じく言葉が言葉であることによつて、又言葉である為にも、そこに初めからなかつたものを見出すことは許されないで、その作者の声とともにそこにあるものが我々に伝はり、ギリシヤ、ロオマの文学でもそれが文学である上では先づそこに我々はその作者達の声を聞き取り、その響きは我々が字面だけからの勝手な読み方をする余地を残さない。さういふ響きにあるものがその言葉であつて、人間が人間の言葉に接して勘違ひする心配はないのである。

一括して言つてしまふならば、ギリシヤ、ロオマの文学には後めたさといふものがない。それはギリシヤ人やロオマ人が反省するなどといふことがなかつたといふことではないが、その反省する自分といふものの正体が解らなくなつたり、自分と呼ぶに堪へない忌しいものになつたりするといふのは彼等の間で見られないことだつた。彼等の精神の透徹した働きが自分といふものを

限なく点検することがあつて人間にとつての自分といふものがそこに確かに生きてゐる感じがしても、それは彼等にはその通りに生きてゐて忌しいものでも疑しいものでもなくて、そこにそれがあることは地中海の日光を浴びた白い大理石の柱が土に真黒な影を投げてゐるのと同じだつた。いつも自分がゐて嘆き、悲み、或は喜び、愛し、憎み、それで自分の眼の前にある景色もそこにあるからペロツプスの土地の全部もお前の愛には換へられないとテオクリトスとともに言ひ、ルキアノスが冥土で見るヘレナの白い頭蓋骨は自分も何れはさうなるから死は恐しいものなので、ルクレチウスの哲学での神々は人間のことになど無関心に存在してゐるのであつても神々とかうして縁を断たれてのた打ち廻る人間が人間でなくなるのではなかつた。

これが古代といふものであつて、それはヨオロツパの人間が彼等の古代と考へてゐた通りのものでもある。ルネッサンスに相当する英国のエリザベス時代には古代のロオマ人にも似たとか、ロオマ人にも恥ぢることがない死に方とかいふことがよく言はれて、それが自殺に就てのハムレットの台詞をそのまま受け入れてもゐた人達の間でのことだつたのを思ふならば、例へばプルタルコス英雄伝に再びそれに接することを得たルネッサンスのヨオロツパの人々がどれだけ大きな魅力を感じたか解る。それは彼等には許されない行為が常識であり、倫理でもある世界だつたから魅力になつた。ここでもう一つだけ古代から例を引くならば、ユウリピデスのメデアは女が男に対して不当に差別を付けられてゐるのに抗議するのに、自分達は戦場に赴かなければならな

いのだといふのが男の口癖であるが、そんな戦ひに三度出る方が子供を一度生むのよりも増したといふ風に言つてゐる。そこには女といふのはみじめなものでといふ種類の愚痴が全く見られない。それは古代の人間にとつて自分が人間であつて自分といふ人間であることが余りに明かだつたのと同様に女も紛れもなく女といふものであり、それを女から奪へないといふ確信であるよりも認識があつて制度や風習の上での不備を別とすれば、女も男と対等にその立場を主張することが出来たからである。

マクベス夫人もダンカン王を殺すやうにマクベスを励す時、自分も子供に乳をやる喜びを知つてゐるが、もしさうする必要があると思ふならばいつでもその子供の頭を壁にぶつけて碎いて見せると言つてゐて、この台詞とメデアのを比べることで古代の文学とその後のヨオロッパに属する文学の違いがかなりはつきりする。マクベス夫人も強い語気で意見を述べてゐても、それは自分が女であることを止めた上でのことで、自分が女である自分でなくなることで一層の烈しさがその言葉に加るとともにこの分裂から生じる後めたさにしまひには夫人も勝てなくて例の、アラビア中の香水を持つて来てもこの自分の手から血の匂ひを消し去ることは出来ないとかく夢遊病患者で終る。この暗さはどこから来るものだらうか。マクベス夫人が悪事に加担するからなどといふことは意味をなさなくて、ユウリピデスのメデアがどんなことをするかはここで改めて言ふまでもない。そして何かの形でこの暗さ、或は一種の後めたさは日本の我々もがヨオロッパの文

学と考へてゐるものに付き纏つてゐて、その文学の性格を掴むには次にはこの暗さを取り上げなければならぬ。それは殆どヨオロツパの文学を定義するものである感じさへする。

或はそれがギリシヤ、ロオマの文学に加へられたのである。この二つの源泉を離れて言はば単独に發生し、後にヨオロツパの文学に合流したスカンヂナヴィア、ケルトなどの遺産を思ふ時、それがヨオロツパの文学に与へたものが余りにも素朴な要素に終り、それ自体にどれだけの価値があるのか、例へば英國に渡つて来たサクソン人が書いたものが文学であるかどうかも疑しくなる。明かにギリシヤ、ロオマ以後の文学、従つてここで言ふヨオロツパの文学と認められるものは先づ新約聖書、プロティノスの哲学、或はアウグスチヌスの神学のやうに古代と同じくギリシヤ語、或はラテン語で書いてあつてもそれが他にこれに代り得る程度に發達した國語がまだなかつた為のもの、そしてそれに続くのが中世紀といふ人間の精神活動が主に文学とは別なことに向けられてゐたかに見える時代を通して次第に芽生え、今日の日本では一般にそれがヨオロツパの文学と考へられてゐるヨオロツパ各国の作品である。

ダンテ、チヨオサア、ヴィヨンなどのものがそれで頭に浮ぶ。前に暗さといふことを言つたのは或は必ずしも妥当ではないかも知れないが、古代にはなかつた暗さ、古代以後のヨオロツパにはない明るさといふものを適宜に言ひ表すのは難しい。ダンテの「神曲」の地獄篇にどれだけ陰惨な場面が出て来ても、単に陰惨な事柄といふだけのことならばそれに匹敵する例を幾らでも古

代の文学から引くことが出来る。併し「神曲」の天国篇を満してゐる光はアルカディアの高原に差してゐたのと違つてゐて、もし古代がその後の時代に及ばないものがこの天国の光にあるならばそれは影である。このことはギリシヤ語やラテン語に遅れてヨロツパで發達した国語で書かれた最初の傑作と言へる「神曲」を例に引いただけでは或はそれ程明瞭ではないかも知れなくて、チオオサアの「カンタベリイ物語」のパラモンとアアシタの話でこの二人の友達が何れもエミリアの美しさに打たれて感じるのが恋愛の情なのか、自分達の交友が破綻を來したことに對する痛惜の念なのか解らなかつたといふやうな恋愛の描写が古代の文学にないことを指摘するにはその為に挙げなければならぬ資料が多過ぎる。

併し例へばヴィヨンが母親に代つて歌つたことになつてゐる詩があつて、この詩まで来ればヨロツパの文学の暗さといふものがこの傑作でもその根柢をなすものといふ具体的な形を取つて我々の前に現れる。ヴィヨンの母親は文盲であるから彼が代つてこの詩を書くのであるが母親は教会に行つてその扉の一方に地獄の絵が書いてあるのを見て恐怖を感じ、一方に天国の絵があるのを眺めて自分も救はれることを望む。そこで歌はれてゐることの趣旨を言へばただそれだけのことであるが、一人の人間が自分といふものの所在が解らなくなるまでに何か他のものの前に立たされ、それが自分といふものが賭けられてゐるからこそなのだといふことの強烈な、或は鮮明な印象は恐怖といふ言葉が当時の綴りで *paour* と書いてあるのが記憶に刻み付けられる位で

ある。その不安のうちに人間の像がくつきり浮び上るとでもいふのだらうか。兎に角、不安なのが自分なのだといふ感じが間違ひなく伝はつて来て、その人間がそこにゐるといふことのこれに増す保証はない。

キリスト教が東方に向ふ代りに西の蛮族の間に広められたことがこの宗教の性格にどのやうな形で影響したかは解らないが、今日残つてゐる中世紀の僧侶達の説教では信徒の肉慾を抑へる為に女の美しさを否定したものと、同じく抽象的な觀念に縁がない野蛮人に地獄の責苦を廻つて永遠といふことを教へるものがその力の籠り方で我々を打つ。一例を挙げれば或るものは永遠といふことに就て、仮にどこかに砂の山があり、千年に一度だけ一羽の小鳥が飛んで来て砂の一粒を啜へて他所の平地に運び、又千年たつて又一粒をそこに移し、これを繰り返してゐるうちにもとの砂の山が消えて他所に新たにそれが築かれるまで人間の魂が地獄で苦み続けてもそれは永遠を前にしては一瞬に過ぎないと言つてゐる。これは我々が今日の教会で聞く種類の説教とその性質が違つてゐて、その成果はヨオロッパで人間の魂といふものの不滅と永遠の地獄の責苦といふ二つの觀念を確立したことにあつた。

さうすると自分といふものが面白いことになる。それだけ明確な形を与へられた永遠の前に立てば自分といふのはどこかに行つてしまつてもよささうなものであるが、その永遠がそのやうに明確なのは自分の苦痛がその永遠だからであつて、このことはその苦痛を免れる為に絶えず自分

を監視してゐることの必要とともにいやでも人間を自分の点検に向はせないではゐない。イエスの考へでは女を見て色情を覚えることが既に姦淫の罪を犯すことだつた。そして自分を点検するなどといふことには人間の精神の構造からして限度があり、恐らくはキリスト教といふ宗教の立場に即すればその先に信仰の問題があるに違ひないが、そのことを考慮に入れても否定出来ないのは人間に自分といふその内面に氣付かせるやうに人間といふものの歴史の上で曾てなかつたと言へる圧力が加へられるのが何世紀が続いたことで、当然これは宗教の問題に止るものではなかつた。

人間が自分の内部を覗いてそこで行はれてゐることに注意するといふのは永遠の責苦といふ種類の刺戟があつて始めて人間が本氣でそれやることで、その結果は自分を見失ふに至ることに他ならず、それ故に十六世紀の宗教改革までは懺悔告白といふことがあつてその道の専門家である僧侶が第三者の立場から当人に代つて結論を与へるといふことがキリスト教では普通に行はれてゐた。又それが自分がしたことを顧みてその是非を判断するといふことであるならばこれは道徳であり、生活であつて、人間の精神といふものが働き出してからといふもの人間がして来たことである。併し宗教改革があつてキリスト教が新旧の両派に分れたのだらうとなからうと、又宗教改革の後も旧教では今日に至るまで僧侶といふ専門家がゐて最終的に決着を付けてくれるのであつても、永遠の責苦といふやうな壮大な地獄絵を見せられたヨオロツパ人にとつて自分といふ

ものに親むのが一つの精神的な風土をなすに至つたといふことに變りはなくて、このことが重要である。

かうしてヨオロツパ人は自分といふものをなくしたのである。或はもしなくすことの反対が所有することであるならば、古代では自分といふものが光や影とともに、或は山や川とともに明かにそこにあるものであるから人間はそれを点検することも、分析することも、その個から全に思ひ及ぶことも出来たので、初めから限界があるものを他の初めから限界があるものと区別する必要がなかつたからその輪廓がはつきりしてゐた。それは所有することであるに違ひない。そしてそれ故に、自分を知れといふことに意味があり、これは後のヨオロツパで余り聞かなくなつた古代の格言の一つである。併しイエスの、なくすことによつて得るといふ説は神学的なのとは別な風に解釈することも出来る。もしヨオロツパ人に自分とは聞いたならばその答へは少くともかなり最近までは自分の魂といふことだつた筈で、さういふ魂といふやうなことになるればそれが何かの形で永遠とか、不滅とか、無限とかいふことに結び付いてしまひにはその行方が知れなくなるが、その他にその魂の持主である自分といふ事情が生じてヨオロツパ人の精神を支配し、或はこれに或る特定の働きを与えることになつた。

その働きは古代人になかつたと確実に言へるものである。そしてそれはヨオロツパ人に特有のものでないが、自分の魂の救ひとか、それが受ける永遠の責苦とかいふことが常に念頭にあれ